

ちょうど臍のあたりが再起する重みとなって
臀部から沈んでいくのを想像する

なだらかな点滅（私もまた、誕生の瞬間）

体の一部が失われ、損なわれていくことの

限らない喪失が

はらはらと落ちてくる

欲望する、あるいはとても激しく

（生まれ落ちた存在であったというなら）

振り払うことも、手放すこともできないまま

一緒に旅に出ることにする

がらんどうの街で

音もなく隣に立って

そうしたら 道に沿ってひらく

しんとした部屋の、敷布のなかで

ともに音もなく数を数え

炎をうつすように

瞳を覗き返すことができる